

**京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書**

平成20年10月22日

財団法人京都大学教育研究振興財団  
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科                      情報学研究科

職名・学年                              博士後期課程1年

氏名                                      深 澤 義 成

事業区分	平成20年度・国際研究集会派遣助成	
研究集会名	第22回理論応用力学国際会議	
発表題目	傾いた側壁をもつ平行四辺形領域における2次元熱対流	
開催場所	アデレード(オーストラリア)	
渡航期間	平成20年8月23日 ~ 平成20年8月30日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料      無      有( )	
会計報告	交付を受けた助成金額	20万      円
	使用した助成金額	20万      円
	返納すべき助成金額	0      円
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	航空機の往復費用 163,390円 ----- 国際会議参加費用 34,133円 ----- 現地での宿泊費用の一部 2,477円 ----- ----- -----

## 成果の概要 / 深澤 義成

この国際会議に参加して得られた成果は、概して四つ挙げられる。

第一に、世界の第一線で活躍する流体力学・固体物理の専門家の講演を聞くことができ、この分野の最先端の研究の一端を知ることができた。自分の研究分野である熱対流に関して、世界ではどのような研究が行われているのかを知り、今後の研究への大きな刺激となった。また、この国際会議は、世界各国から多くの研究者が集まり 5 日間にわたって行われる大規模な会議であり、講演内容は流体力学や固体物理の全般にわたる幅広いものとなるので、自分の研究分野に関する講演だけでなく、その関連分野や周辺分野についての講演も聞くことで、流体力学や固体物理に対する視野を広げ、これから研究を進める上でのバックグラウンドを強化することもできた。

第二に、世界の第一線で活躍する流体力学・固体物理の専門家に自分の研究内容を伝える好機となった。4年に1度しか行われない大規模な国際会議の舞台上で発表できたことは世界の研究者に自分の研究を知ってもらい、またとないチャンスである。口頭発表の後の2日間のポスター掲示は、多くの出席者の目に触れる機会を与え、自分の研究を世界で活躍する研究者に知ってもらい上で大きな役割を果たした。ポスター発表形式は、その場で、一流の専門家の立場からの意見・指摘をもらうことができ、研究の意義や方向性を考えさせられた。また、ポスターはコーヒブレイクが行われ多くの出席者が行き来する大ホールに展示されており、個別の部屋ごとに発表が行われる口頭発表に比べて、専門分野が異なる研究者の目にもつきやすく、専門家とは違った観点からの貴重な参考意見が得られた。さらに、専門が近い流体力学分野の研究者の知り合いを増やすこともできた。初めて知り合う研究者と、研究テーマ以外の話題も含めて研究者同士の意見交換・交流をすることで、今後の有用な情報交換に活かせる人脈の基盤づくりにつながった。

第三に、国際会議がどのようなものかを知ることができた。今回、生まれて初めて国際会議に出席してみて、日本の物理学会や流体力学会との違いをいくつか実感した。1つは発表時間に厳しい点である。日本の学会では持ち時間をオーバーしても発表が続くが、この国際会議では時間を超過すると結論以外省略させられる。他にはコーヒブレイクが充実している点やオプションで半日旅行が企画されているなど、懇親会だけの日本の学会より研究発表の場以外でも研究者間の交流が重視されているように感じた。研究内容の発表、聴講、他の研究者との議論、交流の場としてどのような学会のスタイルが適切なのかを考える材料として、日本の学会だけ参加したのではわからない経験ができた。

第四に、学会発表における英語学修の場として大いに勉強になった。まず講演の聞き取りにおいては、改めてヒアリング力不足を実感させられ、ヒアリング力の向上を痛感させられた。次に、研究内容の英語による発表技術を鍛えることができた。口頭発表の時間は少なく、これまでの自分の研究内容を特筆すべきこととそうでないことに振り分けて、言いたいことを短時間で相手にわかりやすく伝えるために、どの結果をどの順序で並べ、ど

のような説明の言葉を選ぶべきか、といった発表の構想を十分に練らなければならない。そのことにより自分の研究の特徴や位置づけが改めて整理できた。その構想に基づき、伝えたい内容を英語で表現し、聴衆にわかるように発音しなければならず、的確で簡潔な英語に表す表現力と正確な発音が要求され、英語の語学学修につながった。実際の口頭発表では詰まることなく時間内に発表を終えることが出来た。ポスター発表では、視覚的にわかりやすく、読みやすいポスターを英語で作成しなければならない。どの図をどこに配置し、どのような色を使うのが効果的か、数式はどこまで詳しく載せるか、読者が読みやすいように全体の構成をどのようにすればよいか、など視覚的效果を十分に考慮した、わかりやすいポスターの作成方法の勉強になった。また、ポスターの内容を英語で表現するだけでなく、ポスターを使っての読者への説明、及び読者との質疑応答も臨機応変に英語で行わなければならない、英語の表現・発音に加え、聞き取り能力も必要となり、オーラル面でも英語の語学学修につながった。この国際会議の発表を通して経験した口頭発表やポスター発表の発表技術は、今後の国内外の学会発表において大いに役立つことが期待できる。